

私の映画の楽しみ方

大場 正仁



にヘリで降り立ったり、「ファビュラス・ベイカー・ボーイズ」、「ステイキング」等々、私の大好きな映画の主要場面を撮ったホテルであった。先に知っていたらなあーと、とても残念な思っていた。

「昨日の夜はどこにいたの」と女が言う。「そんな昔の事は覚えちゃいないさ」と男が言う。女はさらに「今夜はどうするの?」。男は「そんな先の事、わかんないさ」。

カッコーツ。いつかはオレもこんなセリフを、と思った。「ご存じ、ハンフリー・ボガード主演「カサブランカ」の一節である。わが物顔で振る舞うドイツ兵たちの前で沸き上がるラ・マルセイエーズ(仏国歌)の歌声。なぜか日本人の私まで泣いてしまった。

雨の中、男は、君はオレのものだと言った。女は「人は誰の所有物にもなれないわ」と言う。男は「なれるさ」と言いながら女を強く抱きしめる。胸を熱くしながら見入っていた「ティファニーで朝食を」のラストシーンだ。こんな素敵なセリフ、場面を何十、何百と見たり聴いたりした事だろう。ある映画評論家の言ではないが、まさしく「映画って本当にいいですねえーっ」という心境である。

私が映画と付き合うようになったのは、小学校の入学以前からなので、かれこれ五十年近くになる。小学校当時、同級生に鈴木フミコさんというかわいらしい魚屋のお嬢さんがいた。そのフミちゃんが「大場くん、これあげる」といって渡してくれた小さな紙切れ。よく見ると映画の招待券、考えてみればフミ

ちゃんの家の隣は大映映画館。なるほど…早速映画館へ。彼女も一緒だったのか誰か友人も一緒だったのか、さっぱり覚えていないが、見たのは「剣をとっては日本一」夢は大きな少年剣士「赤胴鈴之助」。主演は梅若正二だった。それ以前にも祖母や母と見に行ったことはあったようだが、タダとはいえ、自分の意思で「これが見たい」と思っていたのは、これが初めてだったような気がする。もう四十年以上もお会いしていないが、フミちゃんお元気でしょうか?

それから、しばらくして洋画の初体験はスタインベック原作・ヘンリー・フォonda主演の「怒りの葡萄」である。西海岸へ向って旅をするトム一家の艱難辛苦の物語だ。劇中流れている主題歌「赤い河」の旋律とハーモニカの音色は、今も耳に残っている。ストーリーとサウンドトラックの相乗性を強く感じるようになったのはこの作品からである。あとは手当たり次第ハリウッド映画を中心に見まくり、一日最高十一本(当時は終夜興行あり)なんてこともあった。

二十五年ほど前になるが、ロサンゼルスに行く機会を得た。宿泊先はビルトモアホテル。あとで聞いた話だが、なんとそこは全米ツアー中のビートルズがファンに追われて屋上

それ以来、外国へ行く度にロケ地をあちらこちら。ニューヨークではプラザ・ホテル、「ティファニー」グランド・セントラル駅、「セントラル・パーク」、「ダコタ・ハウス」など。ローマではスペイン広場、「サンタンジェエロ城」、「カフェ・グレコ」、「真実の口」、「トレヴィの泉」。どこがどの映画と関係するかは、考えてみていただきたい。失敗や若干の危険性はあるが、地図を片手にあの場面、この場面と思いつきながら歩き回るのも楽しいものだ。

こんな事もあった。スペインに行った時のことだ。ジブラルタル海峡を越えればカサブランカは近いと聞き早速手配現地へ。チェックイン後、ホテルの中を捜せば、なんと、あった。夢にまで見た「リックス・カフェ!」。まずはボギーよろしきを立て、カウンターでバーボンを一杯。落ち着いて店内を見渡せば…。なんか違う雰囲気。恐る恐るウェイターに尋ねてみると、「あの映画はハリウッドのスタジオで撮影したもので、ここは観光用に同じように作ったものなんです」とのこと。調査不足であった。

それでも懲りずにそのあともこれからも…。こんな楽しみ方もいいもんですよ。皆さんもぜひ、おためしを。

(山形酸素株式会社代表取締役社長・山形市)